# 《2011年8月関西サロン報告》

【日　時】2011 年 8 月 20 日（土）19:00 ～21:00

【会　場】ホテルクライトン江坂

【テーマ】スポーツを通じた国際協力の可能性

【演　者】岸卓巨（青年海外協力隊青少年活動隊員ケニア赴任予定）

本間圭（青年海外協力隊サッカー隊員ラオス赴任予定）

【参加者9名】参加者：本多克己（シックス）、宮川淑人（枚方 FC）、赤尾修（アミティエ）、高原渉（宝塚 FC）、根本いづみ（シックス）、松田保（琵琶湖成蹊大学）、久保英明、玉井茂、松岡耕自（立命館大学）

【参加者（非会員）5 名】北原徹、竹之内恒平（アミティエ）、原口淳二（アミティエ）、酒井唯（アミティエ）他1名

【報告書作成者】岸卓巨

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

# スポーツを通じた国際協力の可能性

## 岸卓巨・本間圭（青年海外協力隊）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

※当報告書は月例会で使用したスライドとその補足を中心に記載しています。月例会でお話しした内容そのものではない点をご了承ください。

本多：関東の方ではこういう形で月１回月例会をやっております。関西でも年４回やろうと話しています。今日のスピーカーの岸君は東京で事務局的なこともやってくれていて、東京はいつもこのくらいの人数で行っています。関西ではいつも飲み会のような形で行っていますが、今日は東京スタイルで行いたいと思います。

### スポーツを通した国際協力の可能性（岸卓巨）

　こんにちは。岸と申します。サロンでは名簿・会計担当をやっておりますが、関西サロンに参加させていただくのは初めてです。ちょうど７月上旬から９月１週目まで大阪茨木市にあるＪＩＣＡ大阪という施設で青年海外協力隊の派遣前研修をやっていますので、その期間中に関西サロンに参加できればということで、今回の場を設定していただきました。テーマは「スポーツを通した国際協力の可能性」と堅いタイトルを付けていますが、私がなぜ協力隊に応募しようと思ったのか、協力隊で何をするのかということを体験談を交えてお話しさせていただければと思います。

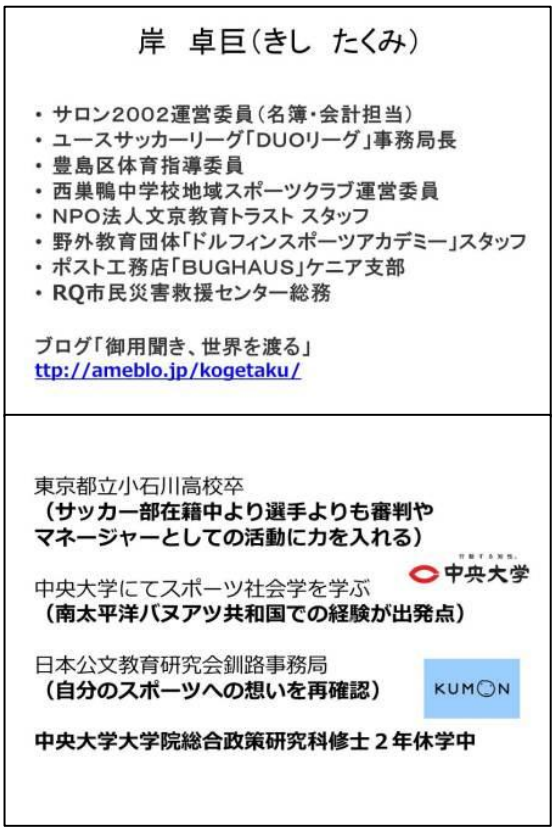
## 自己紹介

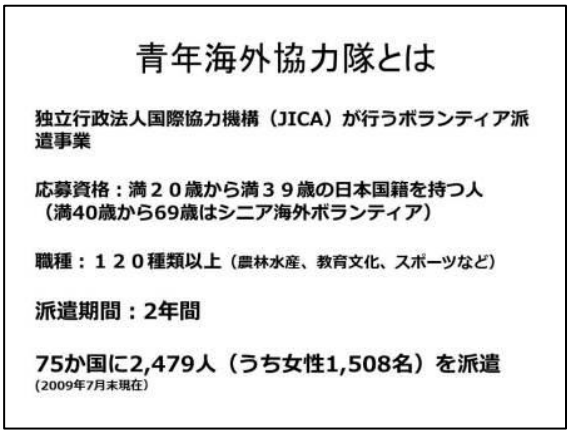
まず、はじめに簡単に自己紹介をさせていただきます。協力隊研修直前にやっていた活動は次ページのスライドの通りです。「地域」「子ども」「スポーツ」を核にさまざまな活動を行ってきました。ブログではケニアでの様子も随時更新していきたいとおもっていますので、よろしければご覧ください。

※ブログ：「御用聞き、世界を渡る」http://ameblo.jp/kogetaku/

もう少し前に遡った私の経歴が次のスライドです。都立小石川高校在学中に、サッカー部に所属していましたがプレーヤーよりも審判やマネージャーとしての活動に力を入れていました。そのことで、小石川高校も所属していた DUO リーグのチュアマンである中塚先生にも注目していただき、サッカーリーグの運営やスポーツ社会学などプレーするだけではないスポーツへの関わり方に興味を持つようになりました。

その後、中央大学に進学しました。中央大学には FLP という学部連携プログラムがあります。このプログラムで私はさまざまな学部の人と一緒にスポーツ社会学ゼミに所属していました。そして、そのゼミの先生が元協力隊でバヌアツ共和国という南太平洋の国でサッカーのバヌアツ代表コーチを務めていた方だったため、その先生の紹介で在学中に２度バヌアツに行ってきました。




その後、公文式で知られている日本公文教育研究会に入社しました。北海道釧路事務局に務めながら道東地区で教室をフランチャイズ経営している先生のサポート業務をしていました。ここで自分のスポーツへの思いを再確認し、会社を退社して大学院でスポーツについてさらに研究していく決意をしました。そして、今はその大学院の修士２年目を休学しています。今日は青年海外協力隊に応募したきっかけとしてバヌアツでの経験と公文での経験についてお話しさせていただきます。

## 青年海外協力隊とは

その前に、青年海外協力隊についてあまりご存知ない方もいらっしゃると思いますので、簡単に紹介させていただきます。（上スライド）

この青年海外協力隊の中で、私の職種は青少年活動というものです。配属先は、ケニアの中でも海沿いのマリンディという場所にあるリマンドホームです。スポーツによる情操教育が主な業務内容ですが、実際に何をするかは行ってみないと分かりません。

## 私の要請内容

派遣国　：　ケニア
受入省庁　：　ジェンダー・児童・社会開発省

配属先　：　マリンディリマンドホーム（ナイロビから東500km）
犯罪を犯した児童を裁判所がそれぞれの処遇を決定するまでの間留めておく未成年拘置所

＜具体的業務内容＞（新規要請）
1．スポーツ指導を主に担当するほか、得意な科目の指導
2．趣味、特技を活かした工作、音楽などの指導
3．リマンドホームのイベントの企画・運営への協力
4．収容児童のデータマネジメントへの協力

## 派遣前訓練概要

- 期間：7月6日～9月8日　65日間（日曜日のみ休み）
- 場所：大阪国際センター（JICA大阪）大阪府茨木市西豊川町

- 主な目的は語学力の習得
- 専門職種、指導科目の技術力向上訓練はなし。
- 毎朝ラジオ体操、国旗掲揚あり。皇太子殿下ご接見あり
- ジーパン、TシャツNG。酒類の持ち込みは退所処分。
- 個室。通常門限22時。
- 訓練後、自治体表敬訪問　→　1～2週間後　出発

現在は、大阪にて派遣前訓練に参加しています。訓練の詳細については上のスライドをご覧ください。ケニアには９月２６日に出発することになりました。

今回の月例会に「スポーツを通した国際協力の可能性」というタイトルを付けましたが、結論を先に申し上げると私にとってのスポーツを通した国際協力とは、次のスライドの通りです。このような考えに至った経緯について２つの経験を中心にお話しさせていただきます。

## 私にとってのスポーツを通した国際協力とは

**一方的に支援しよう、協力しようというものではなく、**

**ケニアの人々と一緒に「ネットワーク」「レクリエーション」「チームワーク」といったスポーツの力をより体感できる機会をつくりながら**

**途上国のスポーツ事情について知るチャンス**
**スポーツの新たな価値を見つける機会**

**そして、それが次の活動を行う活力に！！**

### 青年海外協力隊への応募に繋がった２つの経験

１つ目の経験は、大学時代のバヌアツ共和国での経験です。バヌアツ共和国という南太平洋の島国で、サッカーを通じて使用言語の異なる人たちと一緒に活動できた経験、自分の日本での審判活動が少し現地の人たちの役に立てたこと、途上国開発という文脈の中でスポーツについて考えるきっかけを得たことが、今回青年海外協力隊に応募する１つの大きな要因になっています。

※この経験については、以前月例会で発表させていただきましたので、詳しくはこちらをごらんください。http://www.salon2002.net/monthly/2007/11.html#02

## 南太平洋バヌアツ共和国で感じたスポーツの奥深さ

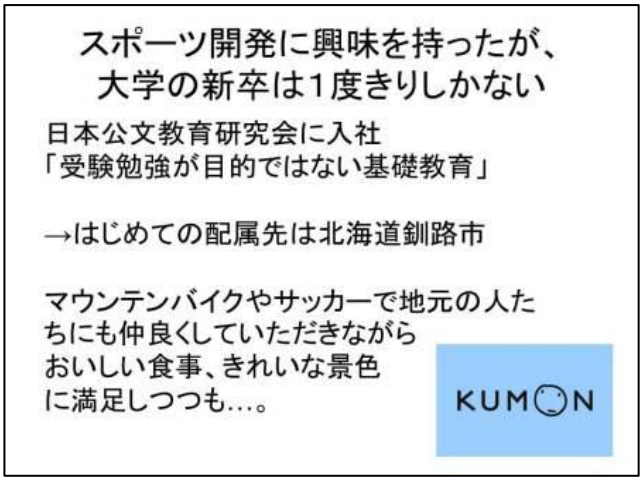
スポーツ（サッカー）は世界の人たちと繋がれる手段

## 自分にもできることがある 入り込むことにより見えてくることがある

Epau村でのルール講習会

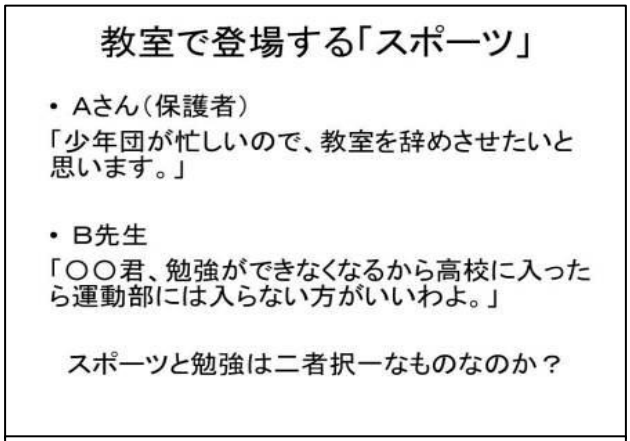
## 様々な人々・組織の想いが交錯するスポーツ環境

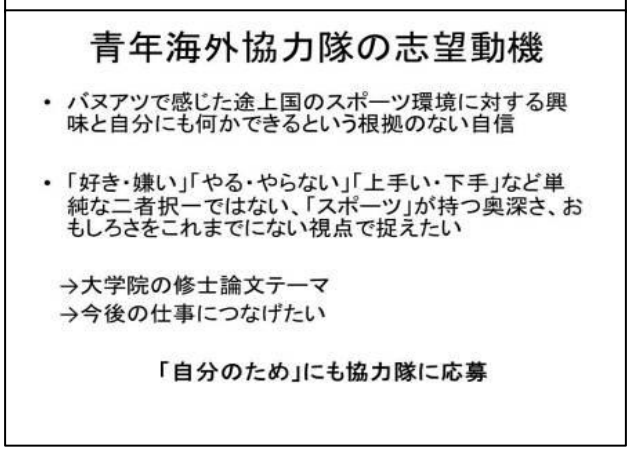
- アメリカ企業の地域貢献事業
- ユニフォームやボールの支給、グラウンド整備
- 賞金




２つ目の経験は私の就職先である日本公文教育研究会での経験です。バヌアツ共和国でスポーツでの国際協力に興味を持ち、大学院進学なども考えましたが、新卒という就職のチャンスがあるうちに民間企業も経験したいと思い、公文式で有名な日本公文教育研究会に入社しました。配属先は、北海道の釧路事務局。大阪の公文本社ではじめて釧路配属の知らせを聞いたときは、釧路について北海道の東にある町くらいしかイメージが湧きませんでした。しかし、実際に行ってみるととてもいいところでした。マウンテンバイクで釧路湿原の周りを走ったり、釧路サッカー協会に所属して社会人リーグで審判をやったりと釧路でもスポーツを通して地元の人たちとのつながりができました。海の幸もとてもおいしかったです。

そんな釧路で私の業務は教室をフランチャイズ経営している先生方のサポートでした。そして、その仕事の中でスポーツについて改めて考えさせられる場面が多々ありました。



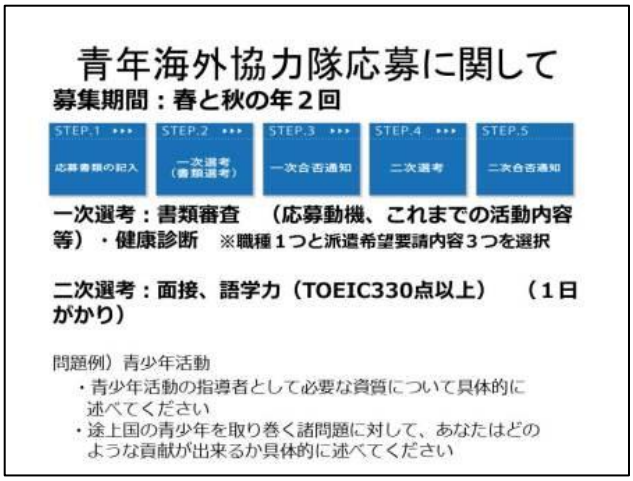

例えば、教室で左のスライドのような会話をよく耳にしました。私はスポーツと勉強が二者択一のもののように捉えられていることにとても違和感を覚えました。私にとってはスポーツはさまざまな捉え方ができるものであり、「好き・嫌い」「やる・やらない」「上手い・下手」など単純な二者択一で捉えられるものではありません。そんな「スポーツ」が持つ奥深さやおもしろさをこれまでにない視点で捉え、提供する仕事ができないか。そのように考えるようになりました。そこで、まずはスポーツと社会の結びつきについてもう少し専門的に勉強したいということで大学時代からお世話になっている中央大学の小林勉先生のもとに再び行きました。

そして、元協力隊員である小林先生から協力隊を勧められたこと、バヌアツで途上国のスポーツ環境に対する興味と自分にも何かできるのではないかという根拠のない自信があったことから、協力隊に応募することを決めました。協力隊には社

会貢献がしたい、国際的な舞台で活動したいさまざまな動機で参加している人がいます。もちろん私にもそのような気持ちはあります。しかし、私の場合、ケニアでの活動から見えてきたものを修士論文としてまとめたい。今後の仕事に繋げたいという。「自分のため」という理由もあります。

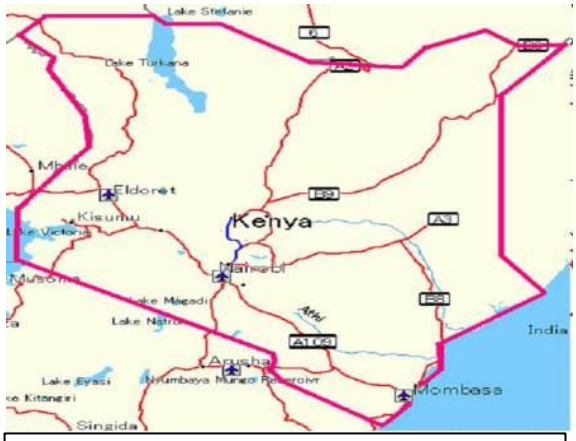
協力隊応募に関しては右のスライドおよび以前月例会で発表させていただいた内容をご覧ください。

http://www.salon2002.net/monthly/2011/06.html




このような動機で協力隊で応募し、配属先はケニアになりました。派遣前研修の中でそれぞれの任国について説明を受ける時間はありますが、最も言えることは「行ってみないと分からない」ということです。

ケニアの概要についても上記 URL からご覧ください。



## 災害ボランティアから協力隊としての活動を考える。

**いざ、協力隊に合格したが**

2つの経験から生じた自分の興味で協力隊に応募。
そして、合格（2月）。
派遣前研修が始まる7月までに活動のネタを増やしたい。

そんな中で、3月11日に東日本大震災発生。

民間ボランティア組織の運営に加わる。

その中で、「スポーツの力」「サッカーの力」について感じることがたくさんありました。

協力隊の合格が決まったのが２月。派遣前訓練が始まるのが７月。派遣前訓練はスワヒリ語習得に重点が置かれ、私の場合は青少年活動など職種のための訓練はあまり行われないため、２月から７月までの間にケニアでの活動のネタを増やしておきたいと考えていました。

そんなことを考えている中で、３月１１日に東日本大震災が発生しました。大学院も４月から休学していたので時間はあります。海外で活動する前に、まずは少しでも日本のためにできることをしたい。そんな思いもあり、野外教育で少しつながりのあった RQ 市民災害救援センターという民間ボランティア組織で活動することを決めました。３月末から４月は東京でもやることがあったので東京にある本部で活動し、ゴールデンウィーク前から宮城県北部で活動を開始しました。ボランティアに来る人向けの説明会を実施したり、イベントを実施したりと総務的な役割で、６月までに東京と宮城を４～５回往復したと思います。あまりケニアのことは考えずに活動していましたが、協力隊関係者との出会いも多く、振り返るとケニアでの活動に活かせそうな「スポーツの力」「サッカーの力」について感じることが多々ありました。大きく３つに分けると下のスライドのようになります。

**災害ボランティアで感じた**
**「スポーツの力、サッカーの力」**
**人々のつながりを促し、高める**

**1．ネットワーク**
→サポーターネットワーク
→地域の拠点となるクラブ

**2．レクリエーション**
→スポーツの「楽しさ」が生活に活力を与える

**3．チームワーク**
→チームをまとめる力
→チームの一員として活動する力

○ネットワーク

今回の震災では、スポーツのネットワークを通してたくさんの人や支援物資、支援金が集まっています。ケニアで私が１人できることは限られています。しかし、私１人が任地に入ることにより繋ぐことができるネットワークはあると感じています。今はインターネットやブログといった自分の活動を発信できる方法もたくさんありますので、人のつながりを作っていければと思っています。

○レクリエーション

次はレクリエーション。今は多くの避難所が閉鎖され、多くの人が仮設住宅に移っていますが、環境が変わることによるストレスを抱えている人はたくさんいます。仮設住宅に同じコミュニティの人同士で入ることは珍しく、さまざまな場所から避難してきた人が生活を共にすることになります。私は南三陸町歌津地区にある伊里前小学校というところの始業式にゴールデンウィーク後に行ってきました。この学校では津波により学校が全壊した近くの名足小学校の子どもたちも一緒に勉強することになりました。私たちの役割は始業式に合わせて両校の子どもたちが体を動かしながらアイスブレークできる機会を提供することです。予想以上に子どもたちの表情が明るかったのが印象的でした。このようにスポーツには慣れない環境や、慣れない人との間にプラスの刺激を与え、その人の生活に活

力を与える力があると思います。私のケニアの配属先はさまざまな悪さをした子どもたちが集まってくる場所です。多くは家庭の貧しさから仕方なく悪さをしてしまった子どもたちのようです。そんな子どもたちにスポーツを通して少しでも活力を与えることができればと思っています。

〇チームワーク

３つ目は、チームワーク。ボランティアの現場ではその場で集まった人たちが即席でチームを作ることになります。そのような場面を多く見てきて思うことは、普段からチームスポーツをしている人はリーダーになるにしても、チームの１員になるにしても適応力があるということです。普段からスポーツチームの中で周りを見ながら自分の役割を見つけている人はスポーツ以外の場面でも集団になった時に力を発揮できるのではないかと思います。スポーツを通して集団でも自分の役割を見つけて心地よく動ける人を育てたい。これが私がケニアでやりたいことの３つ目です。

以上のようにケニアでは「ネットワーク」「レクリエーション」「チームワーク」を大切にしながら活動していきたいと思っています。しかし、これらは私が一方的に与えるものではありません。私にも足りない部分がたくさんあります。ぜひリマンドホームの子どもたちを含め、現地で出会う人たちと一緒にスポーツの力を活用していきたいと思っています。

**＜質疑応答＞**

〇バヌアツで各島の村と首都で援助に差がある理由は何ですか？

岸：一つは、各村に分配するためのマネージメントがうまくできていないということがあります。例えば、FIFA から多額のお金が下りてきても普段からそのような多額のお金を扱っていないバヌアツの人にとってうまく配分することができないという事情があるようです。また、現地の人にとっては島を行き来することが日常的なことではないという理由もあります。

〇バヌアツ人がサッカーを行う動機は何ですか？「世界一幸せな国」にも選ばれたバヌアツの人々はスポーツに何を求めているのでしょうか？

岸：「遊び」「息抜き」としての動機が大きいと思います。「世界一幸せな国」に選ばれたとは言え、現地の人々にとって日常で苦労することはたくさんあります。そんな日常における遊びとして、大人も子どももサッカーをしていると思います。また、バヌアツはもともとイギリスとフランスが協同統治していた国ですので、サッカーは最もポピュラーなスポーツになっています。

〇「世界一幸せな国」にはどのような基準で選ばれたんですか？

岸：これはイギリスのあるシンクタンクによって選ばれたものですが、平均寿命・資源の持続可能性・国民の生活満足度といったものから図られています。しかし、直接バヌアツの村の人に「世界一幸せだと思うか？」という質問をしても、電気もないし、そうは思わないといった答えが返ってきます。何を幸せとするかは非常に難しいけれども重要なテーマだと思います。

## ラオスへの道－青年海外協力隊サッカー隊員として出来ること－

スピーカーをやらせていただきます本間と申します。僕自身サロンに参加するのは初めてですが、サロンの存在自体は去年ライセンス取得の講習会を受講している時にスポーツ社会学の講義で中塚先生から紹介していただきました。今回ＪＩＣＡ大阪で訓練中に岸君と出会い、サロンに興味を持ち参加させていただきました。よろしくお願いいたします。

### 自己紹介

本間圭と申します。関西弁で言うとダジャレになってしまうような名前ですが、今回青年海外協力隊のサッカー隊員としてラオスに派遣されることになりました。

出身は高知県の高知市です。年は岸君と同じ年で１９８５年生まれです。サッカー自体、地元の高知県で始めて高校生までは高知県でやっていました。高校を卒業した後、新潟県にあるジャパンサッカーカレッジに入り、プレーヤーとして経験させてもらいながら、指導者・審判・マネージメントの勉強などをさせてもらいました。在学中にアルビレックス新潟のサッカースクールや大分トリニータにインターンシップにも行きました。たまたまその中で山口県にあるレオネというサッカークラブからお話しをいただき、そこから指導者としてのキャリアはスタートしました。その後、縁があり中国の上海に行くことになり、上海で約３年間指導をして、今回はＪＩＣＡでラオスに行くという流れです。

### １．協力隊への応募のきっかけ

きっかけは２つあります。１つは上海での活動経験。もう１つは、今までサッカーを通して出会ってきた身近な仲間の世界的な活躍が刺激になって自分も海外でもう１回挑戦したいなと思いました。

海外での活動経験については、2008年から2010年まで中国の上海市で上海 FERIE FC というサッカークラブの運営、指導に携わっておりました。やっていた内容は少年少女への普及活動、ジュニアユース年代の育成、クラブ運営、サッカー大会・サッカーキャンプなどの企画、個人的に東アジア地域に関する情報提供を行っていました。2010年東アジア選手権の女子日本代表に関して、韓国女子代表と北朝鮮女子代表の情報提供も、なでしこジャパンとのつながりも活かしてさせていただきました。単にビデオを撮って送っただけなんですが。あとは、ACL の時においしいお酒が飲めるお店を知らないかとか小さな情報提供も行っていました。

写真をご覧ください。サッカークラブに主に通ってきていた子どもは日本人学校に通う子どもたちでした。会員の９割が日本人なんですが、中には欧米系の子どもであったり、アフリカ系の子どもであったり、上海なので中国人の子どももいました。そういった中で日本語をメインに指導するんですが、そういう子どもに対して英語や中国語を交えてやっていました。そういった意味で多民族なクラブであったのかなと思います。

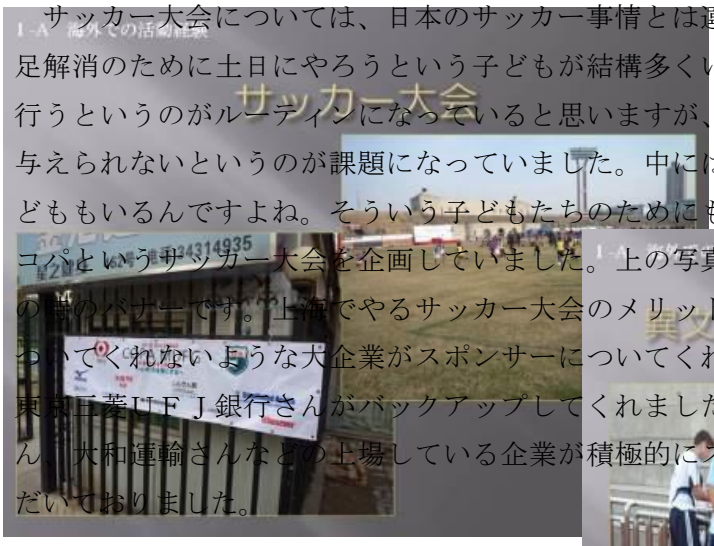
クラブ事情として、上海の事情でもあるんですが、土のグラウンドがありませんでした。練習場に関しては全て人工芝か天然芝ということで、子どもたちにはとても恵まれた環境だったのかなと思いますが、その反面コストがものすごくかかっていました。ですから、クラブ運営は大変だったのかなと思います。

左の写真はハーフタイムに戦術について説明している時の写真です。

あとは、巡回サッカー指導をさせていただいていました。上海には日系の幼稚園が５～６つあるんですが、そこに交渉しにいって午前中巡回指導というのをやっていました。

だいたいこういう子どもたちは３年サイクルで日本に帰ってしまいます。ですから３年間サッカーをやってサッカーを好きになってもらって、３年後日本に戻った時に戻ったところでサッカーをやってもらう。そういったコンセプトでやっておりました。中には５～１０年いる子どももいるんですが、そういう子どもに関してはジュニアクラブでやってもらうということで取り組んでいました。

サッカー大会については、日本のサッカー事情とは違って、平日は塾に通って、サッカーは運動不足解消のために土日にやろうという子どもが結構多くいます。日本では平日練習をして、週末試合を行うというのがルーティンになっていると思いますが、なかなかそういう環境ではなく、試合の場を与えられないというのが課題になっていました。中には平日練習して土日に自分を試したいという子どももいるんですよね。そういう子どもたちのためにも試合の場を提供しようということで、年２回コパというサッカー大会を企画していました。上の写真はその時の写真です。左下が２０１１年大会の時のバナーです。上海でやるサッカー大会のメリットというのが、日本ではなかなかスポンサーについてくれないような大企業がスポンサーについてくれたりします。今回２０１１年大会については東京三菱UFＪ銀行さんがバックアップしてくれました。あとは、ミズノさん、キリンビバレッジさん、大和運輸さんなどの上場している企業が積極的にスポンサーについてくれて、サポートしていただいておりました。



異文化交流ということでは、右はジュニアユースの写真なんですが、月に２回中国のチームとの交流戦というのはやっていました。なかなか日本にいると海外の選手と試合をする経験はないと思うんですが、そういうことが定期的にできるというのは彼らにとってはいい経験になっているのではないかと思います。中国人には中学生なのにものすごく背の高い人とか身体能力の高い人がいて、指導者として見ている僕にもいい経験になりました。ヨーロッパから指導者を雇っているクラブもありました。

ただ、中国サッカー協会の話になりますが、中国人自体全体で今１３億人いると言われているんですが、サッカー協会に登録している選手数は１万人前後だそうです。１億３千万人の日本の方が登録数は多いですよね。そういった意味では中国はすごくポテンシャルが高いんですが、ポテンシャルを引き出せずにいるのではないかと思います。

右の写真は柏レイソルユースの中国遠征の様子です。去年の夏のクラブユース全国大会の前の週に来てくれました。Ｊリーグのユースチームでは初めて中国に来てくれました。南京のグラウンドなんですが、そこでハンジョウリュウチェという今年のアジアチャンピオンリーグで名古屋グランパスが１番最初に戦ったチームのジュニアユースです。こういったチームと交流戦をしました。結果的にはレイソルのスピードとテクニックが上回った試合だったんですが、やっていた選手は日本でやっていた選手と違うし、いい経験ができたという感想を持ってくれました。

サッカー以外の部分で、上海の田舎の紹介もしたいと思います。上海は都会のイメージが強いと思いますが、ちょっと田舎にいくと写真のような風景が広がっています。これは上海のシンプーというところです。川は正直言って汚いんですが、この汚い川で洗濯したりとか普通にやっています。この奥に行くと観光地があり、お土産屋やレストランがあります。

そのレストランでは近くの川で取れたエビが出てきたりもします。そういう経験もしてきました。感想を言えば、まずくはないです。決してめちゃくちゃうまいとは言いませんが、食べられるので大丈夫だなと思います。

右の写真の下の鍋は伝統的な火鍋という料理です。日本で言うしゃぶしゃぶのようなイメージです。スープが２つあって奥の方が真っ赤に染まっているんですが、ものすごく辛い。手前は淡泊なスープで僕もそちらは食べられるんですが、激辛の方を食べると次の日トイレに籠りっぱなしになるような感じですね。

これは知人の結婚式に出た時の写真です。見ていただきたいのが、周りの方普通に私服とかなんですよね。中国の結婚式はフォーマルな格好をせずに、普通にジャージで参加したりとかします。もっとおもしろいのが、新郎、新婦のどちらの知り合いでもない人が普通に参加して飲んでいることもあるそうです。なんでそうなるのかを聞くと、お祝儀がたくさん集まる方がいいということのようです。

上海の風景を見ていただきたいんですが、右上の写真の建物「ＮＩＶＥ」って書いてありますよね。最初「ＮＩＫＥ」かなと思って撮ったら「ＮＩＶＥ」でした。こういう風景がごろごろ出てきますね。左の写真の場所はチープール―と言って世界のＢ級品の服が集まる場所です。定価の６割引きとかで日本のブランドのものも買えます。お宝探しのつもりで行くといいのかなと思います。ただ、人も物も多いので、行くと疲れるので僕も１年に１回くらいしか行ったことがないです。

たくさんの日本企業が進出しています。ファミリーマートを出したんですが、中国だとトイレがなかったり、入ると汚かったり、臭かったりして改めて日本のコンビニの質の高さを感じます。

サッカーを通していろいろな日本人の方と出会うこともできました。日本にいたら出会えなかった人もたくさんいて、正直僕はサッカーしか知らなかっ

たんですが、こういう方々を通していろいろな社会勉強をさせていただいて、ものすごく幅の広がった３年間になりました。

そういった意味で上海での活動を通して、これまでの人生で経験出来ないことを身近で感じることができました。そして、サッカーを通じてたくさんの出会いがあり、学びがありました。それまでサッカーしか知らなかったんですが、サッカー以外のことを自分から知りたいと思えるようになりました。上海自体は経済大国ですが、そうではない国のこともっともっと知ってみたいなと思えるようになりました。それが１つの海外で挑戦したいという気持ちを持つきっかけになりました。

１－２：身近な仲間の活躍が刺激

もう１つ身近な仲間の活躍が刺激と書きましたが、現在世界、特にヨーロッパで活躍する選手って増えていますよね。たぶん今後もっともっと増えてくるのではないかと思います。彼らは僕と同年代でもちろん彼ら自身の活躍もすごく刺激になっていますが、それ以上に右のスライドに載せたような新潟で出会った選手とか、地元で出会った選手とか、身近な仲間の活躍がすごく刺激になっています。たぶんご存知ないと思うのですが少しずつ紹介していきたいと思います。

森安君は僕と同じ年でもともとＪリーグの経験は全くないんですが、自分からシドニーＦＣに乗り込んで行って今活躍しています。今年の５月にアジアチャンピオンズリーグで鹿島アントラーズと対戦をして、国立競技場でプレーしていました。。

明堂君は僕の１歳下なんですが、去年までアルビレックス新潟でプレーしていました。今年１月に契約が切られてどうなるのかなと思ったんですが、タイのパタヤユナイテッドというチームで活躍しています。

和泉さんは僕の先輩なんですが、インドリーグのプネーＦＣというところでプレーしています。インドのプロリーグで初めての日本人選手です。

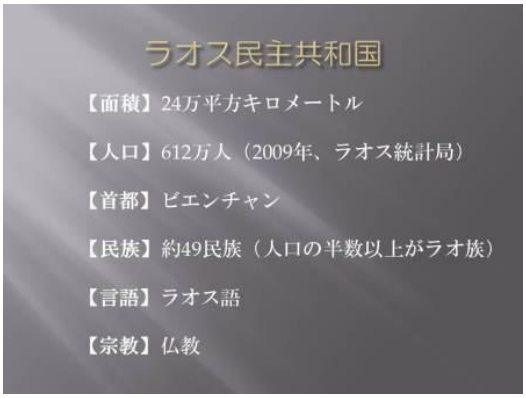
三田さんは３にいる中で１番右の方ですが、インドの２部リーグで監督としてご活躍されています。三田さん自身ももともと青年海外協力隊の経験者で、バングラディッシュで指導していました。結構ＪＦＡ派遣や協力隊で海外の代表監督というのはあるんですが、三田さんの場合は個人での契約で行ったそうです。そういった形で珍しいキャリアをお持ちの方なんですが、今三田さんからいろいろと情報やアドバイスをいただいています。最近またインドでトレーナー探しているという話もあったので、もしトレーナーとしてインドでがんばりたい方がいましたらご連絡ください。

このように身近な仲間が世界で活躍しているということが、私自身の向上心のきっかけになっています。僕自身、アジアの謎の国ラオスに行くんですが、決してヨーロッパのような華やかな舞台ではありません。だけど、自分にしかできない経験かなと思います。そして、僕自身が経験したことが１０年後・２０年後のアジアサッカー発展のために貢献できるのであればがんばりたいという気持ちです。そういった意味で、身近な仲間の活躍が協力隊としてラオスでがんばりたいと思うきっかけになりました。

## ２．２年間の活動内容

次に２年間の活動内容について、A）ＪＩＣＡの試験について、B）やるべきこと、C）今の取り組み、D）やりたいことの４つに分けてお話しさせていただきます。

その前にラオスがどんな国か少し紹介させていただきます。正直私も行ったことがないのでよく分かっていませんが調べてみました。ラオスの概要については右の通りです。僕も今ＪＩＣＡ大阪でラオス語の勉強をしています。



ラオスの写真も集めてきましたので、ご覧ください。

「ラオスのアイドル」とＷＥＢで検索したらこの子が出てきました。名前も全く分からないのですが、たぶんこういう子もラオスにいるんだなというのも１つのモチベーションになります。

ラオスは中国・ベトナム・ミャンマー・タイ・カンボジアに囲まれた内陸の国です。僕が行く町は首都ビエンチャンから北に６００km行ったウドムサイという町です。

ラオスの国旗は日の丸のような形になっているのですが、ラオス自体はもともとフランスの植民地であって、そういうところから赤と青で構成されているということを聞きました。

ラオスではトゥクトゥクというバイクタクシーが交通のベースになるそうです。値段は交渉性だそうです。

アハーンラーオとは決していやらしい意味ではなく、ラオス料理という意味です。代表的なものはカオニャオというもち米であったり、ラープという動物の内臓でできた少しクセのある料理があります。

サッカーのラオス代表も調べてみました。ウィキペディアで調べたところ、あまりワールドカップ予選とかも参加していないようです。ＳＵＺＵＫＩカップというのは自動車会社のスズキがメインスポンサーを務める東南アジアのカップ戦のようです。このように日本企業も入ってきて、アジアのスポーツを盛り上げてくれています。メコンカップはラグビーの大会です。ＨＳＢＣのような大きな外資系の企業も入ってきています。こういうところからもスポーツの可能性を感じるなと思い載せさせていただきました。

Ａ）ＪＩＣＡの試験について

サッカー隊員の試験についてお話しいたします。１次試験が書類選考とレポートです。２次試験が人物面接と口頭試験という内容でした。僕が受けた時は１次試験が３０～４０人いました。募集があったのはラオス、バングラディッシュ、ザンビア各１人でしたので１０倍くらい倍率でした。１次試験で絞られて１５人になって、その１５人が２次試験に進み、最終的に３人に絞られるという形の試験でした。レポートの内容は次のようなものでした。

**問１　学習理論の立場から「技能」と「技術」は明確な差異がある。**
**そのことを説明し、具体的例を用いて説明しなさい。**

**問２　サッカーの攻撃と守備であなたが重要と判断するグループ戦術を２つずつ挙げ、**
**指導方法を展開すると共にそれぞれの指導のキーファクターを列挙しなさい。**

**問３　サッカーのシステムとスタイルの関係について説明しなさい。**

**問４　あらゆることで子ども達は真似ることで学ぶといわれている。**
**サッカーの指導から具体的例を引き出し、解説しなさい。**

また、ライセンスの目安も提示されていて、バングラディッシュはＢ級以上でした。口頭試験では「南アフリカでの日本代表の特徴を５つ述べなさい」というもので、その中の１つについてホワイトボードで説明するというものでした。人物面接というのは何で応募したのかとか、向こうでどういった活動をしたいかとか聞かれました。

Ｂ）やるべきこと（活動内容）

来月の２６日から約２年間、２０１３年の９月２５日まで活動します。活動場所はラオスのウドムサイというところです。内容は３年に１度開催されるラオス国体という日本の国体のような大会に向けて、ウドムサイの中の選抜チームの強化です。ラオス国内では日本人のサッカー指導者として初めてということになります。そういう意味で僕自身責任感を感じ、選手のことだとかいろいろな情報を今集めているんですが、なかなか集められません。ＪＩＣＡ側にどうしたら集められるか聞いても国際電話かけてくださいと言われて、やろうとしてもサッカーの担当者が誰なのかも全く明確になっていなくてそういった意味では岸君と同じで、実際に行ってみないと全く分からないんです。

でも、今僕自身で考えているのは、２年後次の指導者に引き継ぐこともしっかり考えようと思っています。そのための取り組みをしようと思っています。僕が最初の指導者なので、たぶん僕自身が基準になると思うんですね。僕自身の評価が低ければ次から日本人の指導者はいらないと言われるかもしれない。そういった意味で質の高い取り組みをしていきたいなと思っています。

Ｃ）今の取り組みについて

今僕自身どんな取り組みをしているかについては、５つのことをしています。僕も岸君と同じようにＪＩＣＡ大阪で訓練を受けています。その訓練のメインになるのが語学の勉強です。８時４５分から１５時まで、長い時には１７時までみっちりラオス語を勉強しています。あとは、異文化理解や国際協力はどういうものなのかっていう座学での講習を受けています。それから情報収集ですね。個人的に２か月サッカーから離れてしまうので、試合観を養うために数多くの試合を見るようにもしています。先週はインターシティカップや大阪小体を見に行ったりもして勉強しています。あとは、任地行って体調を崩さないように重い腰を上げて動くようにしています。

Ｄ）やりたいこと

実際国体チーム強化の２年間だけでは次に続かないと思っています。若年層の育成や普及を行うことで次の世代に繋がるので、そういった取組も行っていきたいと思っています。ありきたりですが、ウドムサイという町を「サッカーの町」にできたらと思っています。しかし、２年間で全部それができるとは思っていないので、１０年、２０年の期間の中で最初のきっかけとしての活動ができればと思っています。

そのための課題もたくさんあると思います。ラオス自体でサッカーを専門的に教えられる指導者がまだまだ不足しているそうです。プレーヤーの数も不足している。活動費も限られていますので、増やしていかないといけないと思っています。そもそもサッカーの普及活動がないというのも課題です。もしかしたらこれ以外のことも課題になってくるかもしれないです。そういった意味でも、行ってみないと分からないので、行って文化を知り、文化を感じ、その中で自分で課題を見つけて、それを改善していくしかないなと思います。

ウドムサイの風景

ラオスに１次隊でバレーボール隊員で行っている人がいて、その人からいろいろと現地の情報をもらっています。その方からいただいた写真なんですが、すごく田舎な町だそうです。

これは空港です。私ははじめバス停かと思いました。こんな場所で私は２年間暮らします。

そして、これがバス停です。バス停というか車庫のような感じですね。このようにまだまだ整備されていない土地がラオスという場所です。

タラートといいます。他の東南アジアの国同様、外で屋台のように食べる文化があります。こういうところで生活するんですが、ただ一つ気を付けたいのが腹をこわさないようにしたいということです。生肉は決して食べないなど、自分の身は自分で守りたいと思います。

ここは僕が仕事をするウドムサイのスポーツ局です。

恵まれているのは、これがすべて僕の徒歩圏内で行ける場所みたいなんです。空港もバス停もスポーツ局もどういう位置関係なのかは分かりませんが、徒歩圏内で行けるようです。

バレーボールの隊員もここで活動しています。同じ日本人が１人でも２人でもいるというのは心強いことです。そういう意味では恵まれているんだなと思います。

そういうところが管轄しているグラウンドですね。ここが活動のベースになると思います。ラオス自体、サッカーは子供たちに人気のスポーツなので、もうサッカーの指導者が来るとい

うのを心待ちにしてくれているようです。そういった意味で自分もがんばりたいなと思います。裸足でやっている子も何人かいるんですが、そういう場所という心構えを持っていきたいと思います。

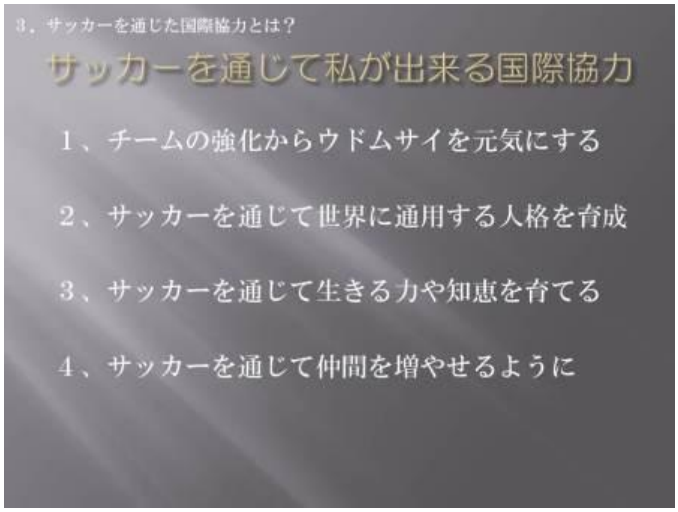
もう１度、２年間の活動内容をまとめたいと思います。ラオス国体に向けた地域の活性化、そのための選手の育成・強化、そのための今良い準備をしようというところです。

**３．サッカーを通じた国際協力とは？**

最後にサッカーを通じた国際協力とはというところについてお話しさせていただきます。実際サッカーでどういった国際協力ができるのかというところが、正直全然分からなくてすごく悩みました。

ただ、最初に考えたのが僕にとってサッカーとは何だろうということです。僕にとってのサッカーとは、競技そのものを通して「生きるための力や知恵」を育ててくれるものだということです。よくサッカーが人生に例えられたり、実社会に繋がるものがあると言われますが、僕自身も本当にそうだと思っています。９０分の中で同じ場面は２度存在しないですし、要所要所で自分自身が優先順位を意識した中で判断を迫られ、決断、実行させられる。そういった意味で自分自身が責任をもってプレーしなければだめだし、ミスした分も取り返さなけれないけない。そういったことから、サッカーを通して「生きるための力や知恵」を養えるようにしたいなと思います。

サッカーが持つ可能性ということも考えました。ボール１個で行えるスポーツですよね。ボール１個あれば狭いスペースでもできるし、凸凹のグラウンドでもできるし、２～３人でもできるスポーツですよね。そして、世界中の誰もが知っている。それは本当に良いことだなと思います。いろいろな人種の子が集まってもできるスポーツですよね。コミュニケーションは大切ですが、言葉がなくてもある程度分かる。何よりも見ている人もプレーしている人も楽しめるスポーツだなと思います。




このような僕が持つサッカー観であったり、サッカーの可能性というものを考えた時に、僕自身ができるサッカーを通じた国際協力というのが次の４つかなと思いました。

チームの強化からウドムサイを元気にするというのは、今回女子のワールドカップでなでしこジャパンが優勝しましたが、あれに僕自身勇気づけられました。あの活躍で僕自身がんばりたいと思ったし、日本全体が勇気づけられたのかなと思います。そういった意味でウドムサイの選抜チームの強化を行って、最終的にウドムサイという町を元気にすることができればと思います。

また、サッカーを通じて世界に通用する人格を育成するということについては、世界に通用する選手を育ててラオスの価値を上げたいし、そのためにも指導者である自分自身が世界基準の人格というものを形成しなければいけないと思います。そういった意味で自分自身にも厳しくがんばっていきたいなと思います。

次にサッカーを通じて生きる力や知恵を育てるというところです。サッカーを通じて仲間を増やせるように。いろいろな保護者の方と話していてもなぜ子どもにサッカーをやらせたかという理由でよく出てくるのが、サッカーやっていれば世界中どこに行っても友だちができるということです。そう

いった意味で、サッカーが好きな人をたくさん増やして、ラオスだけではなくいろいろな国に行ったときにたくさん仲間を増やせるようにということです。

この４つが僕自身ができる国際協力かなと思います。

最後に僕自身の戒めではないですが、僕の心の中で考えていることをお話しします。限られた時間の中で判断を間違えないようにしたいなと思います。２年間しかないので優先順位を意識して、しっかりと活動する。優先順位を意識した中で判断を間違えないというところですね。ラオスというアウェーの国に行くわけなので、アウェーにびびっていたら自分自身が良いプレーできないので、アウェーの空間を楽しめるように余裕を持つというところ。赴任中に日本ではもっとおもしろいことがあるかもしれないということも意識してやっていくということ。そうじゃないと日本にいればもっといいことあったのにと思ってしまうと負のスパイラルに入ってしまいそうなので、そういった覚悟ももって、２年後に次に来る指導者のためにも自分自身が責任ある行動をとる。最後に、素直な心と謙虚な心。やってやるぞという野心を持ってがんばりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

＜質疑応答＞

高原：あの難しいサッカーの試験は誰が採点するんですか？

本間：たぶん協会の方だと思うんですが、２次試験の口頭試験も協会関係者が面接官で来られていたと思います。僕は存じ上げない方だったんですが。

宮川：他のスポーツでも同様の試験があるんですか？

本間：そうですね。バレーボールとかの場合は、２次試験の中で実技試験もあるようです。体育館に別途呼ばれてそこでプレーしたりだとか、その中でいくつか改善してもらったりとかがあるようです。サッカーの場合は、サッカー協会のシステム自体が確立されているので、そこの信用があるので口頭試験だけなのだと思います。

宮川：日本協会の派遣とは違うんですか。

本間：別になります。ただ協会のホームページに海外で活動する指導者のページがあると思うんですが、そこには名前が載ることになると思います。

松岡：たまたま今ブータンで活動されている方と先日お会いしたんですが、その方は協会派遣で行っておられてＪＩＣＡとは別なんですが、ただ日本サッカー協会の国際部とＪＩＣＡは繋がっていて、国の代表とかＳ～Ａ級クラスは協会からダイレクトで来て、その下のカテゴリーになるとＪＩＣＡを通じて広く一般に募集するというしくみだそうです。

松田：僕らが考えるスポーツ文化が地域に根差すという観点から言うと、いかに行政とか地域企業とか、そういうものを育てていかないとたぶんこれはスポーツ文化に繋がらないのかなと思います。次に繋げるための種は蒔いても、同時に土壌を肥やしていかないと種が枯れてしまう。どうやって肥やすかは分からないけれども、そこをぜひ戦ってきてください。

本間：ラオスと日本では文化も違っていて、自分自身がラオスの色を知らないとそこにも行きつけないかなと思います。例えば文化が違うというところで、ラオス時間というのがあって、日本では練習時間が９時からだとしたら９時にはスパイク履いて、ウォーミングアップも終わって、しっかりとトレーニングに入れる準備ができていると思うんですが、ラオスの場合９時になっても選手が来ないみたいです。９時５０分くらいにやっと集まって１０時から練習開始みたいな。

松田：文化を変えないとスポーツ文化は育たないかもしれないね。それがある意味スポーツの力であり、サッカーの力なのかもしれないし、強くなるためには食べ方や寝方やいろいろなものを変えなければいけないかもしれない。

松岡：それを現地の人が望んでいるんですかね？

松田：世界スタンダードという意味ではサッカーが１番スタンダードなので、そこから学んでもらえるかどうかだよね。

本間：僕たちもそういう議論の場を研修の中でやっていたりするんですよ。協調性であったり、マナーであったりという日本の色を現地に持って行った方がいいのか、それとも自分たちが現地の色に合わせてそこから少しずつ変えて行ったらいいのかという議論をしています。